

## 外郎売り

せっしゃ おやかたともうすは おたちあいのうちに ごぞんじのおかたも ござりましようが おえどをたって にじゅうりがみがた拙者 親方と申すは お立合のうちに 御存じのお方も ござりましようが お江戸を甍って 二十里上方 そうしゅうおだわら いっしきまちを おすぎなされて あおもちのちようを のぼりへおいでなされるれば 相州小田原 一色町を お過ぎなされて 青物町を 登りへおいでなされるれば らんかんばし とらやとうえもん ただいまは ていはついでに えんさいと なのりまする 欄干橋 虎屋藤右衛門 只今は 剃髪致して 円斎 と 名乗りまする がんちようより おおつごもりまで おてにいれまする このくすりは むかし ちんのくにのとうじん ういろうというひと わがちようへきたり 元朝より 大晦日まで お手に入れまする 此の薬は 昔 珍の国の唐人 外郎といふ人 わが朝へ来たり みかどへさんだいのおりから このくすりを ぶかくこめおき もちゆるときは いちりゅうずつ かんむりのすきまより とりいだす 帝へ参内の折から この薬を 深くこめ置き ゆゆる時は 一粒ずつ 冠のすき間より 取り出す よって そのなを みかどより とうちんこう と たまわる 依って その名を 帝より 透頂香 と 賜る すなわち もんじには いただき すく に おいと かいて とうちんこう と もうす 即ち 文字には 頂き 透く 香いと 書いて とうちんかう と 申す ただいまは このくすり ことのほか せじょうにひまり居る ほうぼうににせかんばんをいだし 只今は この薬 殊の外 世上に弘まり 方々に似看板を出し いや おだわらの はいだわらの さんだわらの すみだわらのの いろいるに もうせども ひらがなをもって ういろう としるせしは おやかたえんさいばかり イヤ 小田原の 灰俵の さん俵の 炭俵 のと 色々に 申せども 平仮名をもって ういろう と記せしは 親方円斎ばかり もしや おたちあいのうちに あたみかとうのさわへ どうじにおいでなされるか または いせさんぐのおりからは かならず かどちがい なされまするな もしやお立合の中に 熱海か塔ノ沢へ 湯治においでなされるか 又は伊勢参宮の折からは 必ず門違い なされまするな おのぼりならば みぎのかた おくだりなれば だりがわ ほうぼうがやつむね おもてがみつむね きょくどうづくり お登りならば 右のかた お下りなれば 左側 八方が八つ棟 表が三つ棟 玉堂造り はふには きくにきりのとうの ごもんを こしゃめんあつて けいすただしき ぐすりでござる 破風には 菊に桐の臺の 御紋を 御赦免あつて 系図正しき薬でござる いや さいぜんより かめいのじまんばかり もうしても ごぞんじないかたには しょうしんの こしょうのまるのみ しらかわよぶね イヤ 最前より 家の自慢ばかり 申しても 御存じない方には 正真の胡椒の丸呑 白川夜船 さらば いちりゅうたべかけて そのきみあいを おめにかけましよう さらば 一粒食べかけて その気味合を お目にかけましよう まず このくすりを かようにひとつぶ したのうえに のせまして ぶくないへ おさめますると まず この薬を かやうに一粒 舌の上に 乗せまして 腹内へ 納めますると いや どうもいえぬは い しん はい かんが すこやかになって くんぶう のんどよりきたり こうちゅう ひりょうをしょうずるがごとし イヤ だうも云へぬは 胃 心 肺 肝が すこやかになって 薫風 咽より来たり 口中 微涼を生ずるが如し きょちよう きのこ めんるいのいあわせ そのほか まんびょう そっこうあること かみのごとし 魚鳥 茸 蕪類の食合せ 其の外 万病 速効ある事 神の如し さて このくすり だいいいちの きみょうには したのまわることが ぜにごまが はだしてにげる さて この薬 第一の 奇妙には 舌のまはることが 銭独楽が はだして逃げる ひょっとしたが まわりだすと やまとでも たまらぬじゃ ひょっと舌が まはり出すと 矢も楯も たまらぬじゃ そりゃそりゃ そらそりゃ まわってきたは まわってくるは そりゃそりゃ そらそりゃ まはってきたわ まはってくるわ あわやのんど さたらなしたに かげさしあん はまのふたつは くちびるのけいちょう アワヤ咽 サタラナ舌に カヤサ歯音 ハマの二つは 唇の軽重 かいごうさわやかに あかさたなはまやらわ おこそとのほもよろを 開口さわやかに あかさたなはまやらわ おこそとのほもよろを ひとつへぎへぎに へぎほし はじかみ ほんまめ ほんごめ ほんごぼう 一つへぎへぎに へぎほしはじかみ 盆豆 盆米 盆ごぼう つみたで つみまめ つみさんしろう 摘蓼 摘豆 摘山椒 しよやざんの しゃそうじょう 書写山の 写僧正 こごめのなまがみ こごめのなまがみ こんこごめ のなまがみ 粉米の生噛み 粉米の生噛み こん粉米のこ生噛み しゅす ひしゅす しゅす しゅちん 繻子 緋繻子 繻子 繻珍 おやかへいい こちかへい おやかへいにかへい こかへいおやかへい 親も嘉兵衛 子も嘉兵衛 親嘉兵衛子嘉兵衛 子嘉兵衛親嘉兵衛 ぶるくりのきの ぶるきりくち ふる栗の木の 古切口 あまがっぱか はんがっぱか 雨合羽が 番合羽か きさまのきやはんち かわぎやはん われらがきやはんち かわぎやはん 貴様の脚絆も 皮脚絆 我らが脚絆も 皮脚絆 しゃわぼかまの しゃぼころびを みはりはりながに ちよとぬうて ぬうて ちよと ぶんだせ しゃくは袴の しゃぼころびを 三針針中に ちよっと縫うて 縫うて ちよっと ぶんだせ

かわらなでしこ のせきちく 河原撫子 野石竹 のらによらい のらによらい みのらによらいに むのらによらい のら如来 のら如来 三のら如来に 六のら如来 ちよとさきの おこぼとけに おけつつまぎやるな 一寸先の お小仏に おけつつまぎやるな ほそみぞに どじょう によろり 細溝に 泥鱧 によるり きょうの なまだら なら なままながつを ちよとごかんめ 京の なま鱧 奈良 なままな鱧 ちよと四、五貫目 おちятаちよ ちятаちよ ちゃつとたちよ ちятаちよ あおだけ ちゃせんで おちやちやと たちや お茶立ちよ 茶立ちよ ちゃつと立ちよ 茶立ちよ 青竹 茶筌で お茶ちやつと 立ちや くるわ くるわ なにがくる こうやのやまの おこけらこそう 来るわ 来るわ 何が来る 高野の山の おこけら小僧 たぬきひやつびき はしひやくぜん てんもくひやつばい ほうはつびやつぽん 狸百匹 箸百膳 天目百杯 棒八百本 ぶく ばく ぶく ばく ばく みぶくばく あわせて ぶく ばく むぶくばく 武具 馬具 武具 馬具 三武具馬具 合わせて 武具 馬具 六武具馬具 きくくり きくくり みきくり あわせて きくくり むきくり 菊 栗 菊 栗 三菊栗 合わせて 菊 栗 六菊栗 むぎ ごみ むぎ ごみ みむぎごみ あわせて むぎ ごみ むむぎごみ 麦 ごみ 麦 ごみ 三麦ごみ 合わせて 麦 ごみ 六麦ごみ あ の なげしの ながなぎなたは たが ながなぎなたぞ あ の 長押し の 長簀刀は 誰が長簀刀ぞ むごうの ごまがらば えのごまがらか まごまがらか あれこそほんの まごまがら がらびいがらびい かぎくま 向うの 胡麻殻は 荏の胡麻殻か 真胡麻殻か あれこそほんの 真胡麻殻 がらびいがらびい 風車 おきゃがれこぼし おきゃがれこぼし ゆんべもこぼして またこぼした おきゃがれ小法子 おきゃがれ小法子 ゆんべもこぼして 又こぼした たあぶばば たあぶばば ちりから ちりから つたつぱば たっぱたっぱ いっちょだこ おちたらにてくお たあぶばば たあぶばば ちりから ちりから つたつぱば たっぱたっぱ 一丁だこ 落ちたら煮て食お にててもやいても くわれぬものは ごとく てつきゅう かなくまどうじに いしくま いしちち とらくま とらきす 煮ても焼いても 食われぬものは 五徳 鉄灸 かな熊童子に 石熊 石持 虎熊 虎きす なかにも どうしの らしよもんには いぼらきどうしが うでくりこんごう つかんでおんしやる 中にも 東寺の 羅生門には 茨木童子が うで栗五合 つかんでおむしやる かの らいごうの ひざもとさらず かの 頼光の 膝元去らず ふな きんかん しいたけ さだめて ごだんな そばきり そうめん うどんか ぐどんな こしんぼち 鮒 きんかん 椎茸 定めて後段な そば切り さうめん うどんか 愚鈍な 小新発知 ごだなの こしたの こおけに こみそが こあるぞ こじゃくし こもって こすくって こよこせ 小棚の こ下の 小桶に こ味噌が こ有るぞ 小杓子 こ持つて こすくって こよこせ おつとがてんだ こころえたんぼの かわさき かながわ ほどがや とつかは はしっていけば やいとをすりむく さんりばかりか おつと合点だ 心得たんぼの 川崎 神奈川 程ヶ谷 戸塚は 走って行けば やいとを摺りむく 三里ばかりか ぶじさわ ひらつか おおいそがしや こいそのしゅくを ななつおきして そうてんそうそう そうしゅうおだわら とうちんこう 藤沢 平塚 大磯がしや 小磯の宿を 七つ起きて 早天早々 相州小田原 とうちんかう かけござらぬ きせんくんじゆ はなのおえどの はなういろう 隠れござらぬ 貴賤群衆の 花のお江戸の 花ういらう あれ あのはなを みて おこころを おやわらぎや という あれ あの花を 見て お心を おやわらぎや という うぶに ほうこに いたるまで このういろうの ごひょうばん ごぞんじないとは もうされ まいまいつぶり つのだせ ほうだせ ほうぼうまゆに 産子 這子に 至るまで この外郎の 御評判 御存じないとは 申され まいまいつぶり 角出せ 棒出せ ばうぼう肩に うす きね すりばち ばちばち くわらくわらくわと はめをはずして こんにちおいでの いずれもままに 白 杵 すりばち ばちばち ぐわらくわらくわと 羽目をはずして 今日おいでの いずれも様に あげねばならぬ うらねばならぬ いきせいひつぱり どうほうせかいの くすりのもとめ やくしによらいも しょうらんあれと 上げねばならぬ 売らねばならぬと 息せい引っぱり 東方世界の 薬の元々 薬師如来も 照賢あれと ほほろ うやまって ういろうは いらっしゃりませぬか 水ホ 敬って 外郎は いらっしゃりませぬか

「外郎売り」を喋る目的の第一は滑舌の練習。早口は二の次。まずははっきりとした発音を心がける。

台詞廻しの練習でもある。第一声から結びの一言まで、通行人の足を止めて薬を売ろうとしている一人の人物が喋る台詞であることを忘れない。聴く人が思わず薬を買いたくなるよう、明るくリズムカルにテンポ良く。